



「こんにちは。お元気でいらつしやいますか？本部救護所では、急遽、往診していただくなど、大変お世話になりました。貴院の広報誌とおいしなお菓子をいただきましてありがとうございます。こうして、戻られても、山田町のことを心に留めてくださる方がいることが、とてもうれしく、心強く思っております」6月上旬に岩手県山田町に、北海道JMATの一員として医療救援にいった際にお世話になった保健師のSさんから届けられたメールである。

「高血圧と糖尿病で治療している70歳代のお婆ちゃんが全身がむくんでいるので診てほ

《震災関連疾患》を乗り越えて

〜東日本大震災発生後、半年を経過した被災地からの便り〜

情報広報部

橋本 洋一

しいとの要請がありましたので往診をお願いできますか？」この本部救護所が置かれた保健センターに隣接する町役場に勤めているSさんからの直接の依頼であった。Sさん自身のアパートも被災した。1階は津波で破壊されたが、Sさんの部屋のある2階は幸いにも被災を免れた。本年6月、第35回世界遺産委員会です新しく世界文化遺産に登録された平泉が彼女の故郷だが、大震災以来3ヵ月間一度も帰っていない。休みといえる休みを取らず、地元住民の健康管理のために献身的に笑顔で訪問しているSさんの明るさに、私達が逆に元気を貰い、心が癒された。

「山田町の避難所は8月31日をもって閉鎖されました。7月末に予定していた仮設住宅1900戸がようやく1ヵ月遅れで完成し、民間および公営の住宅を含めると、ほぼ全員が入居できました。少しずつ、震災前に戻りつつあり、震災まで営業していたコンビニや洋服のチェーン店などがようやく仮設建物として復活してきたような状況です」。私達が訪れた6月上旬の時点では旧県立山田病院の建物の中に臨時のスーパードー1店が設置されているのみであった。

商店街が仮設建物として復興しつつある中で、高台に商店街を復興させるべきか議論にな

っているらしい。高台は不便だから、また同じ場所に商店街を造ろうという意見も少なくないようだ。地元の意見を最優先することに異を唱える気はないが、今までの地に商店街を復興させた

ら、必ず数十年後に今回と同じかそれ以上の被害を被ることを覚悟しなければならぬ。ドイツの名宰相ビスマルクの言葉に『愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ』という言葉があるが、先人達の経験を、歴史を通して学ぶことができれば幸いであるが、少なくとも自分自身の経験から教訓を得なければ、同じ過ちを繰り返すだけである。これでは愚者以下と言われても仕方がない。私達は震災の悲劇を繰り返さないために、今回の経験から教訓を学び、それに基づいた行動を取らなければならない。

便りは続いた。「震災後、血圧が不安定になったり、食べるものが変わったことにより、脳卒中などが増え、救急搬送される方が増えているような印象を持っています」。いわゆる《震災関連疾患》のことである。毎日のように余震が続き、不安な気持ちで日常生活を送っておられる被災地の方々、長期間にわたる避難所生活で疲弊され、冷たいおにぎりばかりの食事で塩分が過剰に摂取されたり、栄養が偏っている方々のことが綴られていた。

震災直後と比較して瓦礫も徐々に片づき、住民の方々も一見落ち着きを取り戻しつつあるように見える。しかし、かけがえのない家族を失った悲しみはあまりにも大きく、大震災の発生後半年を経た現在でも癒えるどころか、さらに大きくなって、被災者ならびに家族の方々の中に横たわっている。

仮設住宅に居住できるようになったことは一歩前進ではあるが、一方で避難所では見えていた精神面での疲弊感、喪失感という《震災関連疾患》が各住宅の中に隠れて表面化しない可能性がある。今後、さらに一層の心のケアが必要となるだろう。「9月12日から1週間、北海道の心のケアチームが駆けつけてくれました」と感謝の気持ちをSさんが寄せてくれた。

そして、仮設住宅の各住宅に隠れてしまいかもしれない精神面での疲弊感、喪失感に対して、そっと寄り添い、きめの細かな心のケアを行って、この難物である《震災関連疾患》を乗り越えなければならぬ。幾多の困難を克服してきた先人達同様に、今を私達が生き抜いていくために。